北北東側から十一月に撮影
撮影　大河　健三氏

シャーチャンラー峰初登頂を祝う

二〇一〇年五月二日、中国四川省大雪山系の秀麗なシャーチャンラー峰（五四七〇ｍ）に、わが日本山岳会広島支部登山隊が見事初登頂しました。これは三年前のバーワンシャン（霸王山）の快挙に次ぐ朗報であります。

当日早朝、アタックｃａｍｐを出発した登山隊は苦闘の末、松島副隊長と佐藤隊員が主峰へ、また第三峰には吉村隊長と加藤隊員がそれぞれ初登頂を果たしました。この成功を祝い、全支部会員で喜びを分かち合いたいと思います。

本報告書には、遠征中の楽しさやロマンが溢れており、私たちに大きな感動と海外登山への夢と希望を与えてくれることでしょう。

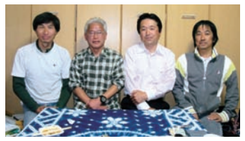
広島支部としては今後も四川省の山岳団体と変わらぬ友好関係を保ち、未登の山々をターゲットに登山活動や学術調査を続けてゆきたいと考えています。

つきましては広島支部会員の皆様には、何卒支部活動への積極的な参加とご支援、ご協力を心よりお願い申し上げる次第であります。

㈳日本山岳会広島支部
支部長　杉　村　　功

遠征の概略

シャーチャンラーは、ミニヤコンガを盟主とする大雪山系の北端に位置し、山麓に多くの氷河湖を抱く、峻麗なピークである。周囲は未だ外国人には未入域で、わずか数名の日本人が四一七〇ｍのＨｕｌｕＨａｉの湖畔に到着しただけである。この度、㈳日本山岳会広島支部では、この地域を「冒険」「ロマン」に満ち溢れる遠征対象と考え、二〇〇七年秋の霸王山遠征に続いて、登山隊を編成した。



登山隊は成都から車で甘孜蔵族自治州丹巴県の党岭村（ＤａｎｇＬｉｎｇ村）三三〇〇ｍまで入り、四三五〇ｍのＤａＨａｉｚｉの湖畔にベースキャンプ（ＢＣ）を設置して登山活動を開始した。登頂ルートを偵察し、五〇二〇ｍのアタックベースキャンプ（ＡＢＣ）から2ルートに分かれてピークを狙った。1つは北東壁に走っているルンゼを詰め、そこから頂上岩壁に取り付き、直接ピークに至るルート。もう一つがノースコルに上がりそこから恐竜の背のような北稜をたどりピークに至るルート。

五月二日、六時に出発した二隊は、北東壁隊が十四時四〇分主峰に登頂。北稜隊は三峰に十五時三〇分到達。二、三峰間のコルから二隊が合流して北東壁を下ってＡＢＣに二十時四〇分に戻った。

登山期間　二〇一〇年四月二十四日～五月九日
登山隊名　日本山岳会広島支部　シャーチャンラー登山隊
登山隊引受　四川大地探検有限公司

㈳日本山岳会　シャー・チャン・ラー登山隊

日本山岳会広島支部
シャーチャンラー登山隊 2010　行程記録

4月
24日　広島～上海～成都
25日　成都～丹巴（タンバ）
26日　丹巴（タンバ）～ダンリン村
27日　ダンリン村～大海子（ターハイツ）4350mBC
28日　BC～偵察　5020m地点～BC
29日　BC　休養日
30日　BC　停滞

5月
1日　BC～ABC5020m
2日　アタック　ABC～頂上～ABC
3日　ABC～BC
4日　BC　休養日（ヤク待ち）
5日　BC～ダンリン村
6日　ダンリン村～丹巴（タンバ）
7日　丹巴（タンバ）～成都
8日　成都
9日　成都～上海～広島

狼の雪原をABC目指して進む　4月28日

（中村　保氏：作成）

北東壁・北稜からの攻略十五時間

■ 装備表

個人装備		共同装備	
登山靴	1	テント4人用ライアウ大(定より割引)	1
靴下	2	雪用ペグ	
スパッツ	1	ツェルト	2
アンダーウエアー上下	1	スコップ	2
ミッドウエア	1	ガスヘッド	2
羽毛服 保温着	1	ガス缶	
アウターウエアー上下	1	鍋 ジョウゴ お玉	1
キャップ	1	鍋敷き	2
目出帽	1	ロールペイパー	1
手袋 毛 厚手	2		
手袋 毛 薄手	1	ロープ８ｍｍ６０ｍ	2
ミトン	1	ロックハーケンチタン製	
サングラス ゴーグル	1	アイスハーケンスクリュー	6
		イボイノシシハーケン	6
シュラフ	1	スリング	20
シュラフカバー	1	キャメロット	1セット
マット	1	デットマン	4
ヘッドランプ	1	スノーバー	2
替えバッテリー	2	ロックハンマー	1
		予備　ATC	1
食器	1	クライミングシューズ	1
箸、スプーン	1		
ナイフ ホイッスル	1	GPS	1
テルモス	1	トランシーバー	3
水筒	1	単3電池 トランシーバー用	
ライター	1	ビデオカメラ	1
コンパス	1		
		食料　登山用	
ハーネス	1		
コマール	1	医薬品	
スリング	5		
カラビナ	5	双眼鏡	1
ATC 歯付カラビナ	1		
		竹竿	
アイスクランポン	1		
アイスアックス	1	中国 日本 JAC の旗	
アイスバイル	1		
ストック	1		
スノーシュー	1		
ヘルメット	1		
整理袋	適		
日焼け止め	適		
持病薬			
洗面具			
ビニール袋	適		
筆記具			
財布			
カメラ			
パスポート			

▲シャーチャンラー北東壁の全景
松島隊：左のルンゼを直上、喉を過ぎて４Ｐの岩登り。
吉村隊：右のコル（写真では見えない）に出て長い北稜を３峰まで16ｐ。
（ザイルを出した距離　1ｐ＝６０ｍ）

■ 夏羌拉登山隊　会計記録

収入	隊員負担金　@45 万 ×4	1,800,000	
	広島支部より	100,000	
	収入計		1,900,000
支出	航空運賃・ビザ他　４名分	536,150	
	食料	24,502	
	ロープ・スリング等	79,472	
	四川大地探検有限公司への支払い	1,120,000	
	お礼　潘・将さん	20,000	
	持込荷物重量超過　530 元／ 104 元　飲物	10,000	
	海外傷害保険	18,640	
	支出計		1,808,764
	差引　残金		91,236

入山方法、山容

１．入山方法丹巴から DangLing まで車で北西へ約６８㎞
　党岭村から Dahaizi の湖畔ＢＣまで徒歩８㎞（南西方向）
２．山容　大きく４つの岩稜からなる
（１）北稜は恐竜の背のような顕著なピークがいくつも連なり、
　主峰へと続いている。大雪山系の主尾根でもある。
（２）北東稜は急峻で途中にニードル状の岩峰があり、
　頂上に突き上げている。きわめて、魅力的な岩稜。
（３）南東稜は南稜に突き上げ、主峰へと続く。
（４）南陵は長大な尾根で大雪山系の主尾根である。

シャーチャンラー地理的位置
　主峰：N 31°02′27.3″　E101°18′56.5″（GPSでの測量値）

複雑な稜線 不安定な岩（北稜隊）

吉村 千春

プロローグ

写真を眺め、楽しかった日々を思い出している。二〇〇七年、正確な日は覚えていないが、日の丸産業の河尻社長に見せて頂いた、一枚の写真が事の始まりだった。抜けるような青空に、天に突き立てたような山が映っている。

一目で、行こうと思った。

よくよく聞いてみると、四川省、甘孜蔵族自治州の、丹巴からそう遠くない。二十日で勝負がつく。まだまだ稼がないといけない私にとって、願ってもない魅力的な山に思えた。その年の秋は広島支部の十周年で、覇王山に登った。

遠征後、（二〇〇八年）次の山にと目標を定め、準備を進めた。一九八三年、シャモニで知り合い、九二年の四姑娘山で一緒に苦労した、小寺敬止さんをまず誘う。（愛媛県西条市在住）小寺さんの後輩でパートナーの、加藤満さんも参加を希望した。ところが、数ヶ月後、父親の病状が悪化、小寺さんは大工を一時休止し、父親の介護に専念する事になった。遠征は振り出しに。

翌年は、四川大地震の影響や、チベット暴動のあおりで、登山許可が出なかった。二〇一〇年、年が明け、いよいよ一人でも行くかと覚悟を決めていた。ある朝、覇王山の戦友、松島宏さんにダメもとで声をかけると、「行ってもいいよ」という返事。また数日後、佐藤建さんも写真に惹かれ参加表明。トントン拍子に登攀隊員がそろった。一時は諦めていた加藤さんも遠征が具体的になると、「思い切って行くことにするよ」と言って来た。これでメンバーが揃い、遠征の準備に拍車がかかる。ＪＡＣ広島の主催、岳連の後援も決まり、一月二月は大山でトレーニング。お互いの実力を知る。何度か私の事務所で、鍋をつつきながら、遠征の夢を語り、シャーチャンラーが皆の胸にスコンと落ちた頃、広島を出発した。

遠征はシンプル、そして短期間、そして出来るだけ安くというのが、スタイルだ。今回の世話役、成都の張兄弟は私の老友人。ガスボンベや行動食、また山の麓の子供たちのお土産（文房具）もリクエストして事前に購入してもらっておく。

遠征成都に着いた翌朝、山に向かって出発。登山期間は2週間。基礎体力がしっかり有れば、五〇〇ｍ台の山はそれくらいの期間で登れる。要は、高度順化をうまくこなす事、特に初期の行動が肝要。焦らず、のんびり、ゆっくりと動き、ストレスを貯めない。馬鹿話やＹ談で盛り上げよう。ダイアモックス（半錠）を成都から朝、晩と飲み、順応出来たら、アタックに出かけよう。きっと上手く行くはずだ。後は天気次第。

「大きく崩れる事は無いようです」という宮田先生の出国前のお話に正直勇気付けられた。

四月二十六日、最終の部落、ダンリン村に到着。翌日、ヤクに荷をつけ、Ｂ・Ｃを目指す。峠に着くと、憧れ続けたあのピークが、写真と同じように突立っている。いつもの登高欲がフツフツと湧いてくる。やはりお山はカッコ良くないとね。美しいルートからそのピークに立ちたい。その為にはどんな苦労もいとわない。ただそれだけの事。こんな海外のアドベンチャーに心惹かれ、早や三〇年近くになる。

life is too short. Adventure for my best life.

ベース傍ら、湖面に浮かぶシャーチャンラー山群。雪面には狼の足跡。そして、夜には満天の星空。ゆったりとした時間。私たちの為に腕を振るってくれる調理人、ショウさん。安全登山の為に、お世話をしてくれる連絡管、パンさん。また、ヤクを操り、荷物を運んでくれたシャーチャンラーＢｏｙｓ（地元の青年）。ダンリン村では、村長（旧）のムーゾンさん一家の方々に世話になる。

私たちのささやかな冒険の為に、心よく動いてくれる人達がいる。皆さんに心から感謝の言葉を送ろう。

夢のような遠征

頂上アタック

五月二日、頂上アタックはスピード重視、二隊に分かれる。吉村隊は、北稜のコル～北稜を登るもの。松島隊は北東壁のルンゼを登り、喉（狭くなった箇所）を越した辺りから、壁に取り付き、直接ピークを狙う。

緊張した出発の朝を迎え、四人の気持ちは、シャーチャンラーへと昇華していく。私たちは、複雑な稜線でしかも不安定な岩にてこずり、あっと言う間に時間が経っていった。六〇メートルザイルで十五Ｐ位登って来ただろうか。行く手を大きなピークが立ちふさがる。

その頃、松島隊と初めて無線が通じ、松島さんが頂上（1峰）に登った事を知る。無事だったことに胸を撫で下ろし、隊の成功を心から喜ぶ。そして私達の行く手のピークが頂稜の一角、3峰とわかり、闘志が湧く。その後、松島隊も、2峰・3峰のコルへ下降を開始した。焦る気持ちを抑え、確実に雪壁をトラバースし、我々もコルに降り立つ。時計は既に四時を回っている。

相棒の了解を得て、私たちの登攀をここで打ち切る。（3峰の数ｍ下で記念撮影をした）

頂上の1峰まであと2Ｐ、高度差にして四〇～五〇ｍであろうが、松島隊を待たすわけにはいかない。早くそして安全にアタックキャンプに帰りつく事が隊長としての責務。六〇メートルザイル二本での懸垂下降。恐ろしい雷が間近にとどろき、暗闇の中、なんとか北東壁の急なルンゼを降りる事が出来た。後は、慎重に後ろ向きで下ってゆく。

連続十五時間の行動。アタックキャンプに帰り、長い緊張から解き放たれた。

三日、パンさんとショウさん、そしておいしいワインが僕たちを待っているはずだ。ふらふらするが、元気を絞り出して降りて行こう。

エピローグ

今回、もう一人、お世話を頂いた人を紹介したい。

大川健三さん。

若いころより山岳写真の愛好家で、ＮＥＣ（技術者）を退職後、丹巴美女と結婚。七歳の一人息子と共に丹巴で暮らす。夏は四姑娘山の環境保護の傍ら、四川省の山岳地帯の風物誌を撮影。

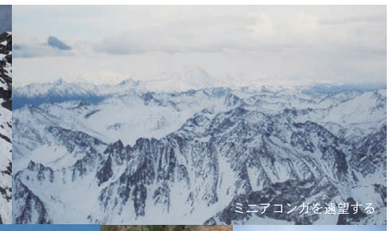
座右の銘：人生は感動の旅路。

私も九〇年からの三年間、同じ四姑娘山に情熱を注ぎ、運よく南壁の初登攀を勝ち取る事が出来た。その後、横断山脈研究会にお互い入会し、この山域の情報を送って頂いていた。

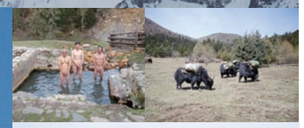
憧れだった大川さんに丹巴で初めてお会い出来、そして心より歓迎された事は、私にとって正に「感動の旅路」となった。

いざ、偵察に

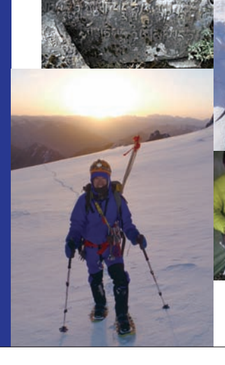
三峰頂上稜線を行く満兄


ミニアコンカを遠望する

立ちふさがる三峰



パートナー吉村氏について
冬の大山で出会ってから　もう　16年になるのだろうか !?　自然の中での山を純粋な目で見てありのまま　愛している人だと思った。数年前から自然の中で共に経験を分かち合うようになり　同じ気持ちで自然に接していられるのは　私にとって　大切な存在になっている。今回　夏羌拉峰登山で一緒に未踏峰へ一歩を　刻んだ事は私の一生涯での誇りとなっている。そして彼の眼は　変わらずに　前向きである。僕と同じ人種だと感じる。（加藤）



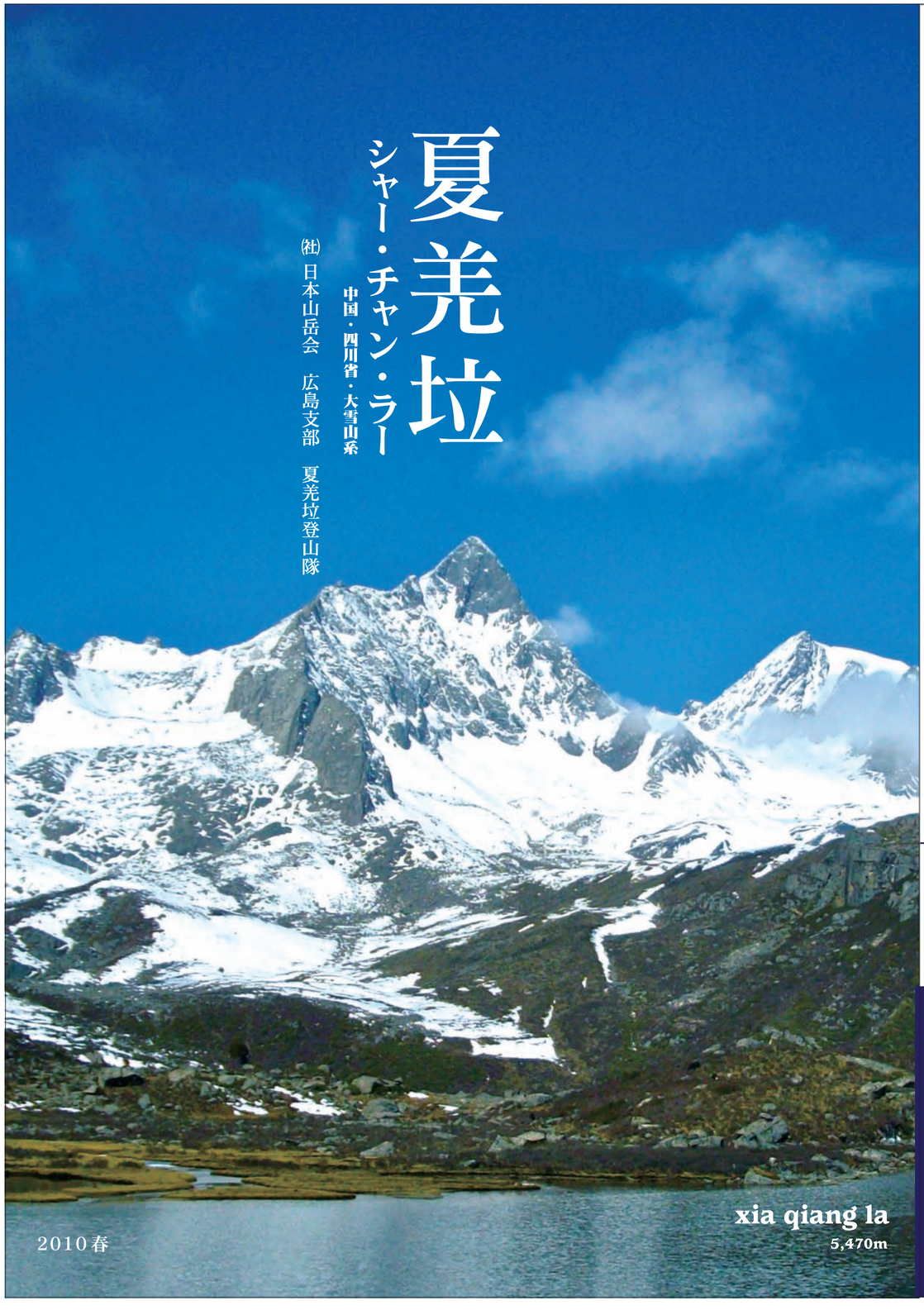
大山でのトレーニング

ベースキャンプ食堂テント

▲四姑娘山

▲蜀山女神

http://www.sgns.gov.cn/scholaweb/conts.htm



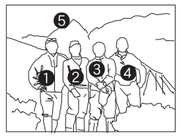
夏羌垃

シャー・チャン・ラー

中国・四川省・大雪山系

㈳日本山岳会　広島支部　夏羌垃登山隊

メンバー
❶吉村
❷加藤
❸松島
❹佐藤
❺シャーチャンラー



吉村 千春　〒739-0412 広島県廿日市市[redacted]
anavan@m08.alpha-net.ne.jp　昭和34年4月13日生まれ

僕の夢

林住期に入り、自分はいつまでも若くないなーと実感しながらも、まだやれるぞと自らを励ましつつ、辺境の地や美しい山々に憧れている。子育てが大方終わり、残りの人生をかけても良い対象（夢）はなんだろう？
Ｈ．Ｗ．ティルマン（英１８９８～１９７７）は、５０代山から海へ転身し、なんと７９歳まで、古い帆船で地球の僻地、南氷洋の孤島、極地に近い島々を海洋探検する。
彼の生涯に想いを馳せ、そろそろ僕も海にもと思うが、言い訳ばかりで何とも情けない。

松島　宏　〒733-0821 広島県広島市西区[redacted]
hiroshim@ccv.ne.jp　昭和27年5月20日生まれ

私の夢

高所登山や遠征に行きたいがために50歳で仕事を辞めた。8年経って4回の遠征が実現した。
今回のｼｬｰﾁｬﾝﾗは吉村さんに誘われ、幸運が重なって初登頂できた。短いが充実した遠征であった。
夢はあと15年くらい登り続けることだ。今、遠征仲間と登山ガイドの資格取得に挑戦している。広島にプロガイドの組織を作ること。若い人を育てること。わんぱくのこどもたちが成長して、一緒に遠征に行くこと。
こんな馬鹿げたことを夢見ている。結構真面目に実現させるつもりである。

加藤　満　〒793-0027 愛媛県西条市[redacted]
yura-riy@yahoo.co.jp　昭和33年8月25日生まれ

今からのチャレンジ

見果てぬ夢は　数々あれど　今の目標はと言えば
1) ヨーロッパのアルプスクラッシックルートを登りたい　2) パタゴニアを馬に釣竿と毛布を付けてバイネまで旅する
3) スターナビゲーション(ヨット)でミクロネシアを旅する　チャンスが来る事からやっていくつもりです。

佐藤　建　〒734-0034 広島県広島市[redacted]
ZWS00057@nifty.ne.jp　昭和34年10月14日生まれ

クライミングに夢中

これからも登りたい山,壁はたくさんあります。しかしその前にやっておきたいこともあります。
クライミングの能力を今よりもっと高めたいことです。そうした上で,まだ見たことのないヒマラヤの峰々,ヨーロッパアルプスのとがった峰,スキーを使ったヨーロッパアルプスオートルート,パタゴニアやヨセミテの大岩壁,高くなくとも人の訪れていない山々,,,。行きたいところは山ほどあります。それも今回のような気の合った楽しい仲間たちと登りに行きたいものです。

**人生の後半期にこそ自己の夢を実現しようとする想いをそれぞれが記し、
今回新しい人生の出発記念になればと思いこの報告書を纏めてみました。**

党岭村旧村長　奥様　娘さん

シャーチャンラーボーイズ
（馬方）

連絡官
潘亜渝

コック
鈡景兵

張継跌　張少宏
＜四川大地探検有限公司＞

あとがき

一つの夢が終わった。
シャーチャンラー、とても素晴らしい山だった。
まだまだ、大陸（中国だけではない）にはエキサイティングでまだ誰も知らない自然（山々）が僕達を待っている。
窮屈な時代にあっても（年々、チベット登山は厳しくなっている）、夢を持ち続け、チャンスを伺おう。
そして、今以上に体を鍛えよう。
今回、僕たちのささやかな夢に共感してもらい、多くの方々に助けて頂きました。
心から感謝し、御礼申し上げます。
ありがとうございました。

登山隊隊長　吉村　千春

お世話になった方々
ＪＡＣ広島支部　杉村　功　長谷川　忠彦　佐藤　弘
広島県山岳連盟　田中　勝彦　宮田　賢二　円石　利恵子
横断山脈研究会　京才　昭　国枝　忠幹（イラスト）　小寺　敬止
中村　保　兼森　志郎　大久保　泰志　半川　守之
河尻　清　兼森　路子　大塚　守雄　アシーズブリッジ
大川　健三　奥島　康弘　岡谷　良信　ヤッホー
甘孜蔵族自治州丹巴県県政府　四川省登山協会　四川省外事弁公室
広島県日中親善協会　湯崎英彦広島県知事　（順不同　敬称略）

横断山脈研究会 発行
「NEWS LETTER」
http://www.hengduan.jp/

２０１０年１０月１日発行
発行者：ＪＡＣ広島シャーチャンラー登山隊
印　刷：株式会社原色美術印刷社
編集者：吉村 千春
制　作：アナヴァン アドライン事業部
デザイン：小柳 円香

頂上にて

（北東壁直上隊）

1峰に立ち「ウォー！」と絶叫

松島　宏

一目惚れ

二〇〇七年に覇王山に登ってから九二年、忙しさに翻弄されているときに吉村さんに誘われた。「松島さん、シャーチャンラに登りませんか？」見せられた写真は古い友人の河尻清さんが撮ったもの。河尻さんの息子とは二十数年前の鳥取国体で監督・選手の関係で優勝した仲である。その写真の山は見た途端に一目惚れした。マッターホルンのようにとがった美しい秀峰であった。因縁めいたものを感じ、何とか行くことにした。そのうち九八年に岳連隊で天山山脈に一緒に行った佐藤建が参加を表明した。サトケンは当時ハンテングリ七〇一〇ｍには登ったものの、高所順応に失敗し、高所登山を封印していた。彼の復活は個人的に嬉しく、なんとか一緒に頂上に立ちたいと思った。吉村さんとは覇王山で一緒に初登頂し気心は知れている。吉村さんの四国伊予西条の友人加藤満さんも大山で一緒に登り、実力もあり、楽しいあんちゃんであることを確認した。かくしてシャーチャンラ登山隊が結成された。松島・吉村・佐藤はＪＡＣ、名越さんに相談すると覇王山と同じ中国四川省でもあるし、「ＪＡＣ隊でいいんじゃない」支部長ほかの承認をいただいた。多くのカンパもいただいた。登山は元々プライベートな遊びであるので気心の知れた好きな奴と登りたい。加藤さんにはＪＡＣに入会をお願いした。これで準備が整った。感謝。

速　攻

四月二十四日に広島を出発し四日目には四三五〇ｍのＢＣキャンプに到達した。今回は短期速攻、二週間で決着を付けるアルパインスタイルである。高所順応の失敗は許されない。今まで使ったことのない高山病予防薬のダイアモックスを使用した。この薬は元々緑内障の治療薬で利尿効果があり、眼圧を下げる薬だ。なぜかその緩やかな利尿効果が高山病の初期症状の頭痛や食欲不振、平衡感覚の麻痺を緩和してくれるらしい。チョモランマで亡くなられた福山の大田祥子先生にも薦められたことがあった。三五〇〇ｍのダンリンの村から朝夕半錠ずつ呑むことにした。

五日目、写真で見た北東稜の裏に回りこみ北東壁の下五〇二〇ｍにアタックキャンプを決定した。東壁は垂壁であるが北東壁は少し傾斜が緩くなんとかなりそうな予感がした。六日目、休養。七日目、悪天候で休養。二日間の休養で脈拍も六〇を切るまでに落ち着いた。いよいよアタック体制が整った。

アタック

八日目の五月一日、何とか晴れて、アタックキャンプ入りする。スノーシューが大活躍である。高まる期待感と緊張感が久々で心地よい。サトケンもかなり緊張してきたみたいだ。十二年前の天山では隊長の自分が一番登りたくて興奮していて隊員の様子なんか見ていなかった。今回はサトケンの様子も冷静に見ている。サトケンは気力も体調も大丈夫だ。偵察の時にすでにルートは決めていた。隊としては初登頂することを優先し、易しそうな北稜ルートと決めていた。私は吉村隊長にお願いし、ダイレクトルート、つまりアタックキャンプから北東壁の雪のルンゼを直上し、頂上に続く岩稜を左上する。それが私の理想のラインだ。岩登りが得意で順応も上手くいっているサトケンを誘うと快諾。アタックは吉村隊長・満兄（マンニイ）の北稜隊、松島副隊長・サトケンの北東壁直上隊に分かれてのアタックとした。下山は一緒だ。

九日目の五月二日、朝四時起床、六時出発。四人とも緊張はしているものの元気に出発。ここからは当日の日記―

サトケン復活、大活躍！

松島・佐藤は北東壁、吉村・加藤は北稜へ向かう。松島先頭でラッセルし雪の斜面を登り始める。雪の斜面は意外と柔らかく膝までのラッセルだ。疲れる。傾斜が段々急になりルンゼ状に狭くなった「喉」に近づく。雪は徐々に締まり、キックステップとなる。喉は三ｍ程垂直となり岩が狭まった場所である。松島、なんとかフリーで抜けようと悪戦苦闘するも、失敗。観念してロープを出す。しっかりした支点は作れないが、頭上に大きなサイズのカムをきめて突破。雪壁はどんどん急になるが確実な支点が取れないのと、落ちるときは一人で！という考えで、ロープなしでどんどん登る。これがアルパインスタイルだ。四時間程度頑張り、ルンゼの終了点に到達、岩がジャンクション状になった場所、標高五三五〇ｍ。目の前に二峰と三峰のコルが見える（ジャンクションから一五〇ｍ）

我々はここから頂上まで岩稜を辿ることに決めていた。一ピッチ目、サトケンがリードする。アイゼンは外し、登っていく。約一時間かけ六〇ｍのロープいっぱいルートが延びた。落石・浮石のオンパレードで時間がかかる。サトケンは久々のアルパインクライミング。アルパインのリードは怖い。フォローしてみると、これでもかというくらいプロテクションを上手にとりまくっている。さぞかし、ロープが重かっただろうと笑ってしまう。でも上手に工夫して支点を作っている。二ピッチ目、松島がトップに代わり支点は省略しまくり三つか四つの支点で五〇ｍ程度ルートが延びる。三十分。支点が少なくランナウト状態であるが落ちない自信があれば時間が短縮できる。サトケンは私の落とした落石で鼻の横から出血。ヘルメットにも食らったらしく。頭がクラクラすると嘆いていた。落石で死なかったことに感謝。三ピッチ目、サトケンがトップでリード、遅々として進まない。松島、夜のビバーグがチラつき始め焦りが募る。下から「急げ！急げ！」と怒鳴り散らしているのだが、どうやら聞こえていないようだ。一時間位たち岩場に雪が混ざり始めたようでアイゼンを付けると言う声が聞こえる。もう三十分かかり松島が続く。登ってみると三級程度の階段状のルンゼ状岩壁。雪が混ざったので敬遠したようだが傾斜のかなりきついカンテ状の岩稜にルートが伸びる。わたし的には「勘弁してよー！」の世界であるが、サトケン六〇ｍいっぱいルートを伸ばしてくれた。感謝

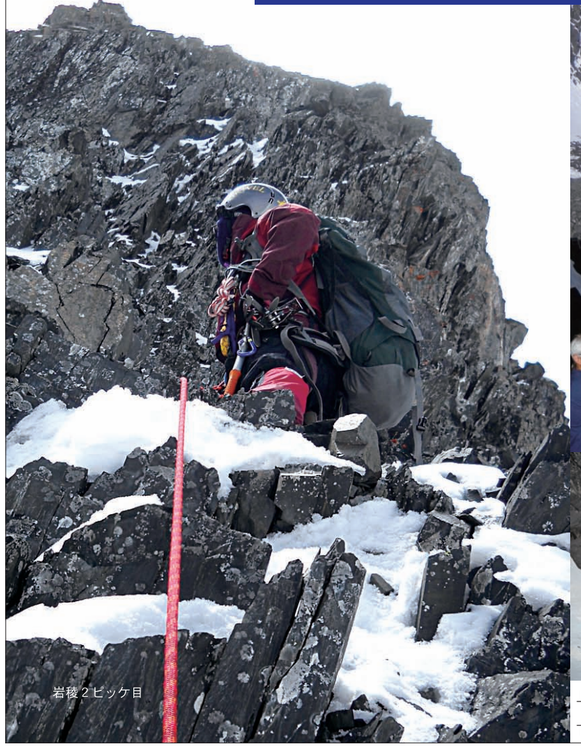
初登頂！

四ピッチ目、松島がリードを始める。目の前の岩から雲が流れ、たなびき、頂上が近いことを感じる。一〇ｍ登って、視界が開け目の前に頂上らしき雪のピークが現れる。頂上に間違いないと確信したとき、喜びが溢れ出してきた。思わず、下で確保するサトケンに向かってガッツポーズをとり、嬉しさの余り「ウォー！」と絶叫する。頂上に着いたのが二時四十分。サトケンもかなり疲労しているみたいで時間がかかる。三時二十分サトケン到着。頂上は地元の人々に敬意を表して踏まなかった。一ｍ下で記念撮影。前回の覇王山ではＪＡＣ旗がなく岳連旗で記念撮影したら、怒られた。（笑）今回はかわいい日章旗とＪＡＣ旗でパーフェクトだ。初登頂を味わっていると突然吉村隊長の声が無線で入ってくる。かなり下である。初登頂を報告した。喜んでくれた。そのうち十五時三十分、三峰の肩に吉村さんが現れる。吉村隊は十六時、三峰到着。しかし、時間切れである。十六時半下山を開始する。下りは吉村隊が登ってきた北稜を予定していたが、かなり悪いので松島隊の雪壁を下ることにした。最初六〇ｍの懸垂下降二ピッチ。ロープ回収に手間取り、二時間かかりジャンクションへ。暗くなり大粒の雪が激しく降り始める。落雷の音に怯えながら喉の通過も懸垂下降。午後八時四十分全員疲労困憊でアタックキャンプに転がりこむ。ビバークは避けられたが、十五時間の行動はダメージが大きく、疲れすぎて食べることができなかった。翌日の朝も食べる気がせず、水分摂取のみでＢＣに這うように帰還した。今回の遠征はどんぴしゃりの完全試合。パーフェクトだった。理想的な遠征となった。力がついたのかもしれない。ただの幸運にしても。山の神に感謝。支えていただいた皆様に感謝。

アタックキャンプにて
出発前、緊張する二人

まっちゃんについて
今回，北東壁を一緒に攀じたまっちゃんとは，国体の選手強化の関係で３０年近く前からの付き合いです。特に広島国体（１９９６年）前後には，富士登山競争などの山岳マラソンの大会に一緒に参加しました。体力は抜群であることはよーく知っています。
また，１９９８年にはカザフスタンのハンテングリ，ポベータ登山に一緒に行き，７０００ｍを超える高所で驚異的な強さも目の当たりにしていました。５５００ｍのシャーチャンラー登山に関しても，まっちゃんとなら安心でした。（決して千春さんだと心配ということではありません。）
頂上アタックの朝も，不安で胸がいっぱいの自分をよそに「さあー，やるぞー」といった風で目指すルートへとどんどんと突き進んで行きました。いつもイケイケです。私は追いつくのが大変でした。
（佐藤）

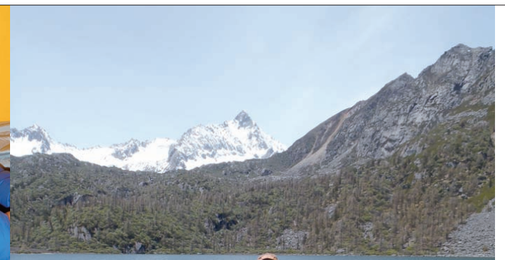
岩稜１ピッケ目


岩稜２ピッケ目

上：四川登山協会副秘書長
　劉 峰氏より登頂証明書を頂く
下：喉の通過

シャーチャンラーとご対面

BCテントの中で



フルハイ湖の湖畔にて

村長宅前にて、お別れの日

アタック前の緊張感

不安定な岩稜を確実に登ってくる満兄

北稜ののこぎり

逆さシャーチャンラー

満兄(まんにー)の紹介

毎年夏に行う、沖之永良部島（ダイビング合宿)では、大変お世話になってま〜す。
水の中の満兄は、まるで水を得た魚のようで、その後姿いつも感動しています。それもそのはず、ダイビングの本数も 1,400 本を超える猛者です。
今年は、憧れだった、ヨットを手に入れましたね。(銘艇の誉れ高い、VAN　DE　STADTデザイン　PIONIER9)二度の航海中、悪天に捕まりましたが、安定感抜群でしたね。
将来は、沖縄まで、ご一緒したいものです。
海やお魚のことは、何でも知っている、頼りになる兄貴分です。

シャーチャンラーでは、持ち前の明るさと、のりの良さで隊を盛り上げてくれましたね。
山でも今後の活躍が楽しみです。
僕にとって、生涯を通じ、自然の中(海や山)で遊べる大切な友人です。(吉村)

大変お世話になった
丹巴県共産党
書記長さんと乾杯！

三峰のピークにて

アタックの朝

FASTEN　ORION 号

続けたい感動の旅（北稜隊）

加藤　満

準備も仕事も私事も、すべてが忙しくゆっくり登山を考える時間も無いままに出発の日を迎えた。「本当に自分は登るのだろうか？」などと感じながら夏羌拉登山隊は超特急で、四月二十五日丹巴村までやってきた。停電の中たどり着いた丹巴の町はチベットだった。十年前のネパール遠征の時と同じ風景だ。大川さんと会った。温和で真面目な方だ。自分に正面から向き合っている。

四月二十六日党岭村三四〇〇m。緑と水のあふれる豊かなコミュニティだ。ここではチベット語の「タシデレ」（こんにちは）が通じる。四月二十七日ヤクに荷物を荷揚げしてもらい、四二〇〇mのBCまで約六時間のキャラバン。途中夏羌拉がみえた時、みんな夢中で写真を撮った。あまりの美しさに神の山であるのがよくわかる。

四月二十八日BCより偵察にAC（アタックキャンプ）予定のコル五〇〇〇mまであがる。私は高度順応がうまくいって無いので少し手前でダウン。AC予定地はピーク近くまで続くルンゼのすぐ近くになった。この日松島・佐藤隊が「ルンゼー北壁ルート」そして吉村・加藤隊が「北稜ルート」の同時登攀をすることが決まる。できれば頂上で出会い、ルンゼを一緒に下降する。雪崩は無さそうだが落石しそうな緩い岩稜が気になる。

四月二十九日休養日。午後より荒天。雷・風・雹・雨・降雪と全部来た。四月三〇日荒天のため沈殿する。霧・雨・降雪。五月一日霧・降雪で待機。九時半頃から雲に隙間が発生。十時半、ACに出発。ガイドの藩さんに「頂上に登るまで降りてこない」と告げて出発。十五時頃、AC着。

五月二日皆で無事成功を誓って手を握る。六時アタック出発。北稜ルートは、取り付きのコルまでスノーシューでクレバスを避けてあがる。コルの西側（向こう側）では無数の見事なクレバスを乗せた氷河が大きな舌を出している。見事な眺めだ。八時コルより登攀開始。北稜西側のガレを、左でアックス、右でストックのバランスを取りながら詰めていく。二時間ほどすると急峻になってザイルを出す。雪とガレ岩が混じった稜線を、右に左にいくつもの大岩を避けながら高度をかせぐ。足場が悪すぎて左で踏んだ岩は東の氷河めがけて落ちていく。次に踏んだ右足は西の氷河へめがけて崩れていく。一瞬も気が抜けないステップが続く。ここにいる限り安全は無い！でも不思議に冷静な自分がいる。呼吸だけが苦しくて一歩が重い。数ピッチ目のチムニーで吉村氏の左足場が崩壊しヒヤッとした。この時「わっ！」の声が北壁のサトケンさんに聞こえたらしい。次のピッチで松島氏の声が聞こえた。「近くにいる！」「ピークが近づいている」だがピークは見えない。時計は十五時三十分をまわっている。あせる！ピバークが頭をよぎる。高度計は五四〇〇m近い。取り付きの向こうのスノーピークは、地図では五二〇〇mだがいつまでたってもここより高い。余計にあせる。岩稜の隙間に松島氏を確認した。吉村氏が「オーイ！」と声をかけている。次のピッチでピークが見えた。この位置はピーク3のようだ。少し低い。このピークで記念撮影をした。時間は十六時三〇分、あと一時間あればピーク一・二とトレースできたのだが既に周りは黒い雲に覆われ雪まじりの風が吹いている。

松島・佐藤隊はピーク二からザイルを伸ばし、ピーク二と三のコルへ降りようとしている。我々四人はこのコルで出会い、十七時ルンゼを下降開始。ここからの西側の眺めは一番遠くに一段と高い六〇〇〇m以上ありそうな山脈が見えた。ヒマラヤの端だった。　懸垂二ピッチ、既にヘッドランプが必要だ。息はあがって体が思うように動かない。サトケンさんもきつそうだ。「クライムダウン二〇〇mで、懸垂一ピッチ！」松島氏の的確な指示が疲れて動けなくなりそうな体に動く意思を与える。シリセードで楽をしようとするが疲れて立ち上がれない。倒れながらフラフラでたどり着いたAC。時計は二十一時近くになっていた。四人ともヘトヘトで水分しか取れない。

五月三日相変わらず誰も飯が食べれず　水分補給だけでBCへ下山。BCでも私は飯が食べれず、水分のみで過ごした。結局、この3日間で四、五キロほど体重が減っている。連続で長時間のアルパイトが体力を奪ったらしい。五月四日ガイドがヤクの手配に党岭村に伝言に降りた。私はあまり動かずテントで沈殿。夜、茶碗一杯の焼き飯が食べれた。はやくここを出たい！と強く思う五月五日党岭村に下山。三八〇〇mの温泉に行く。十一日ぶりだ。やっとリラックスできた。五月六日丹巴村まで下山。大川さんと再会。大川さんの生き方に感銘を受けた。

あとがき

すばらしいカッコイイ山でした。貴重な自然がありました。いつまでもこの自然が崩れずに残ることを願っています。私はいつも「自分の歩いた一歩は二度と踏むことの無い片道切符なのだ」と思いながら旅をしています。そんな中、大川さんやシャオホンやジュエと出会い自分と同じ匂いを感じました。泣けるほどうれしかった。それから応援していただいた皆様、サポートしてくれた四川大地探検有限公司、丹巴村、党岭村の皆様、また我々を導いてくれた河尻さん、大川さん、中村さんに、深く感謝しています。ありがとうございました。

そして一度しかない大切な時間を共有して頂いた夏羌拉登山隊の皆様本当にありがとうございました。これからも感動の旅を続けていきましょう。

なんてかっこいい山だろう！

（北東壁直上隊）

佐藤　建

あのてっぺんに行きました

シャーチャンラー峰の写真を見たのは、去年の十二月。岳連事務所に用があり立ち寄った私に、松島さんから見せられた一枚の写真。そこには、凛としたたたずまいの山が写っていた。

「この山に登りたい。」

翌日には、隊長の吉村さんに電話を入れ、登山隊に参加したいと申し入れた。高所登山は、九十八年のカザフスタン、ハンテングリ峰（七〇一〇m）以来である。あの時は、なんとか登頂できたものの、下山では高所の影響で、皆さんに迷惑をかけやっとのことでBCに戻ることができた。今回もあの時の再来があるかもと心配であった。一、二月は大山でトレーニングし、3月には台湾の玉山（三九五二m）に登ることができた。それ以外は、普段通りのクライミングに精を出して、出発日を迎えた。

四三五〇mのBCへは、広島を発って、四日目に入ることができた。初めてシャーチャンラーに対峙した時、「わー、なんてかっこいい山なんだろう。」と思った。

次の日、ルートの偵察に五〇二〇mまで上がった。頭痛などの高所の影響は少ししかなく快調であった。間近で見る壁は、威圧感があり、どこをどう登ったらいいのかなかなか思いつかない。でもよくく見ていると、北東壁の中に二本のルンゼが走っている。このどちらかを使って頂上岩壁の下まで登ると、なんとかなりそうである。よし、ルートは決まった。BCに戻り、一日休養を取ることにする。明日いよいよアタックするという晩は、なかなか寝付けなかった。わくわくというより怖いという気持ちが勝っていた。さらに追い打ちをかけるように葬式の夢まで見る始末。あぁ心が弱いなぁ。

しかし、アタックに出る朝四月三〇日は、あいにくの天候。（しめしめ。今日は行かなくていいぞ。学校をずる休みするような気分。でもいつかは行かなくちゃいけないんだよなぁ。）気圧が下がってきて昨日までの好天から、下り坂のようである。しっかり休養して気圧が上昇傾向に移ってから出発したいと思った。次の朝五月一日も天候があまり良くなく、今日も休養日かと思っていると、急に青空が広がりだした。これを逃すことはないと、あわてて出発の準備をする。時計の気圧計を見ると昨日とほとんど変わっていないではないか！（行きたくないよう。）と心でつぶやきながらBCを出発する。

先日の五〇二〇m地点に彦ちゃんから借りたゴアテントを張る。ゴアのテントは快適快適。夕食は日本食のオンパレード。脂っこい食事ばかりだったので、おいしい！おなかいっぱい食べる。水分を多く取ったので、夜中、我慢しきれず用を足しにテントの外へ。なんと快晴ではないか！山々が月明かりに照らされて、何と美しいことか！山々に神が住んでいると思われるほどである。

五月二日アタック開始。松っちゃん、サトケン隊は北東壁の左ルンゼを登り、頂上岩壁を超えピークに立つルート。千春、まん兄隊はスノーコルから恐竜の背のような北稜を辿りピークに立つルートをそれぞれねらう。

登攀具を身につけ出発するが、息がすぐに切れ足が重い。まあそれもそのはず、ここは五〇〇〇mを超えている高地だもん。ゆっくりゆっくりと雪面に足跡を残しながら、最初のポイント、ルンゼの喉の部分にやってきた。松っちゃんが果敢に突破を試みる。ちょっと難しそうなので、ここでロープを付ける。左上のクラックにカムをセットしてこの部分を超える。ロープはまたしまい、ノーロープでルンゼを登る。右ルンゼとの交差部分で左上の壁にルートをとる。ここでロープを結び、いよいよ岩登りが始まる。雪がほとんどついていないのでアイゼンを外す。一ピッチ目はサトケンがトップで行く。岩場はⅢ級程度であるが、プロテクションが取れない。ハーケンを打とうするが、リスが少なくあっても根元まで入らない。スリングを岩角にかけたり、カムをセットしたりしながらやっと一ピッチを終える。フォローで松っちゃんが登ってきて、そのままトップへ。ガラガラ！あっ！落石だと思うと同時に上唇と鼻の間に当たる。痛い！またまたガラガラ！ワァー逃げなくてはと思っている間に今度は新調したヘルメットにゴーンと一発岩が当たる。グーで思いっきり殴られたような感じ。ヘルメットが新しくてよかった。二ピッチをフォローで登り、三ピッチ目はまたまたサトケンがトップで行く。

このピッチは初め雪がついた凹部分を行けそうなのだが、ここがなんともいやらしい。周りをよく見てみると右側のカンテ部分が行けそうなのでそちらに変更。快適に進む。しかし、その上は今以上に雪が付いているので、ランニングビレーを取り、アイゼンを付けることに。しかし、このアイゼンを付けるのに一苦労。はあはあいいながらなんとかアイゼンを付け、登り続ける。すると壁の傾斜が落ちリッジラインになってきた。北東壁から北東稜にでたなぁ。ここでピッチを区切ることにする。松っちゃんは時間がかかりすぎていらいらしていることだろうなぁ。四ピッチ目は松っちゃんの番。10mばかり進んだところで、ウォーと雄たけびをあげている。頂上が見えたようだ！やったね！おめでとう！十四時四〇分初登頂は松っちゃんだ。

フォローで僕も頂上へ。狭いようー。二人揃って写真なんて取れないようー。互いにJACの旗を持ち記念写真を取る。もちろん神の山なので、山頂より一mほど下で写真に収まる。本当は両側がすっぱりと切れ落ちていて、立とうと思っても立てないの。ⅡⅢ峰間のコルで北稜隊と合流して下山開始。十六時三〇分。明るいうちにテントに戻れればいいのだが。慎重に氷の壁を懸垂下降する。ビーズ玉のような雪が降り出し雷鳴も轟く中、下っていく。二十時四〇分、五〇二〇mのテントにやっと戻る。気持ちは満ち足りているのだがみんな疲れきっていて、食事は喉を通らず、水分だけを取って寝る。

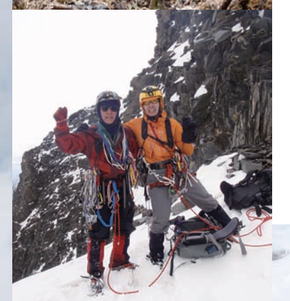
でもまあよくもワンプッシュで登れたものだ！それに広島を出てたったの九日目である。

こんなに順調にいっていいのだろうか？そんなに思えるぐらいうまくいった。これもみなさんのおかげである。感謝、感謝。

左上：落石を鼻の下に受けてしまいました。これだけで良かった
上：身を守るのは自分です
下：雪壁をダブルアックスでどんどん進む

サトケン！
佐藤建さんは９８年の天山遠征以来の同行で、内心嬉しかった。彼は私同様大学山岳部出身で、クライミング好きの元気なアンちゃんというイメージであった。その彼も 50 を超えた！彼も現役だし、60 前の私も現役で頑張っている。負けられない後輩、てなところか？　彼との付き合いは長い。サトケンが 20 台の頃、岳連で彼は国体選手、私は高校生のコーチや監督でよく一緒に山を走った。彼を一言で表現すれば「真面目で誠実なクライマー」。よくトレーニングはするし研究もする。私はええかげんで不良でアル中、思い込んだらがんがん突っ込むタイプだから、冷静沈着なサトケンと一緒に登れば助けられることが多い。今回もずいぶんと助けられた。98 年 7000m峰のハンテングリに登り、高所障害でフラフラになったサトケンと一緒に下りたときのしんどかった思い出が懐かしい。今回は復活サトケン！って感じで本当に嬉しかったし、楽しかった。またこれからも一緒に登りたい。（松島）

みなさんのおかげで登れました
感謝！感謝！



あとはアブザイレンで下るのみだ
Ⅱ、Ⅲ峰のコルにて

必死に安全地帯へ

狼の足跡

地元の子供達に、松島・佐藤 元教師から文房具をプレゼント

クライミング中、ベースキャンプを見下ろす